



アジア人口セミナー開く

小林 和 正

1981年3月13、14日の両日にわたり、東南アジア研究センターにおいて「アジア人口セミナー」が開催された。センター主催の人口分野の国内研究集会として、この規模のものはこれが初回であったので、テーマを特定のものにしばらず、アジア人口研究のいろいろな側面とアプローチについて、その経験を学び、討論できるような形のセミナーを企画した。日程の関係で報告数は7報告に限られたが、それでも、集落レベルの野外調査の報告から統計資料を用いた、より広域な地域人口の実証的研究、さらに将来人口推計の問題まで各種の報告を含み、地域は東南アジア、インド、パプアニューギニア、日本におよんだ。

セミナーは13日午後1時半から開かれ、渡部忠世所長の挨拶、筆者による趣旨説明のあと、ただちに報告に入った。最初の報告（座長：鈴木継美氏）は大塚柳太郎氏による「サゴヤシ常食集団の人口支持力」で、サゴヤシを常食とするパプアニューギニアの1部落における人類生態学的調査の報告である。はじめに人類学・考古学などの分野での人口支持力の概念やその測定の問題にふれたのち、調査部落におけるサゴヤシ、焼畑、狩猟をめぐる生業の特徴、系図調査による人口増加率の推定などについて報告があった。サゴヤシはたん白がほとんどなく、ミネラルもビタミンもないエネルギーのみの食料であるから、サゴヤシ常食集団の人口支持力の議論は、エネルギー論だけでは成立しないわけで、ほかの栄養素が制限要因になっているのではないかというようなことが、一つのポイントになろうという意見を座長の鈴木氏は出された。

次（座長：前と同じ）は五十嵐忠孝氏の「西ジャワ水稲耕作民の生態」と題するスンダ人の1村落の人類生態学的調査の報告で、特に米について、その収穫から消費までの過程で行われる分配に関する慣

行を考慮に入れた上で、世帯ごとの最終的とり分が、各世帯の米の消費量をどの程度に充足しているかという、農業労働力の投入から米が農民の口に入るまでの全過程を分析し、村落住民の生計維持機構を、そのような側面から解明しようという意欲的なフィールド調査の成果の一端が披露された。その計量的分析は、たとえば、毎日食べる飯の量を各標本世帯ごとに計量し、それと手に入れる米の量との関係の分析から、雨期作から乾期作までの間に食べるべき米をつくるに必要な水田の広さを推計する試み、さらにそれを土台にし、水田所有面積と米を手に入れる量との関係から、生存水準を保つべき成人ひとり当たり水田所有面積を推計する試みや、賃労働者の賃金を米換算した場合の米の入手量と生存水準との比較などの諸問題にわたり、最後に、供食儀礼で消費される米の量の調査の重要性に言及された。人口学的側面では、婦人の年齢推定の方法がユニークで注目された。

第3の報告（座長：土屋健治氏）は、加納啓良氏による「ジャワの稲作農業と人口——若干の統計的観察——」と題する報告で、ジャワの高い人口密度と稲作農業との関係は、基礎的統計の観察からも一応明らかであるが、この関係を詳細に吟味し、またその歴史的变化を分析すると、どういうことがあらためて問題になるかを主題とされ、その材料として、植民地期（1920年）と現在（1977年）の2時点でのジャワの人口と水稲作（米作地化率、単位面積収量、人口ひとり当たり生産高）についての地域別（1920年80分州、1977年83県）総計を用いられた。この検討は同時に、クリフォード・ギアツの「農業のインポリューション」(1963年)の図式から落ちていられると思われるいくつかの重要な点を吟味するためでもあると氏はのべられた。加納氏のポイントの一つは、同じジャワの中でも人口分布、稲作生産力とその構

成要因, さらにその歴史的変化のパターンにはかなり大きい地域差があって, そのような地域差をギアツのような地域類型概念でとらえるのは少し無理なところがあり, したがって, ジャワ全体の稲作発展のパターンについてのギアツの図式は, 一定の限られた地域範囲でしか妥当しないのではないかという示唆にあった。加納氏は最後に, 今後の一層精密な研究において歴史的事実として留意すべきこととして, 過去半世紀間のジャワ人口の増大, 独立後の大都市の発展, かつての輸出向けエステート農業の後退に伴う資源配分の変化の3点をあげ, これらが稲作農業に与えてきたインパクトの重要性を指摘された。以上3報告をまとめた総括コメント(座長: 筆者)が討論者坪内良博氏からあって初日のプログラムを午後6時半に終了した。

第2日目14日は午前9時半から4番目の報告(座長: 筆者)が「歴史人口学」と題して速水融氏により行われた。江戸時代の人口調査(1721~1846年)の資料にもとづく全国的概観と明治以後の資料によるそれとを関連づけることに中心をおかれ, 徳川後期の国別人口の増加率の状況については, 一口でいえば, 西南日本から北陸にかけての増大, 関東から東北にかけての減少, 残りの地域での停滞という大体の色分けができるが, 明治10年代の郡別本籍人口統計による増加率や20~49歳人口割合の地域差をみると, 東日本での人口増大が明治初年より10数年あるいはそれ以上さかのぼった時期(幕末開港期ごろ)から起こったように推測されるということや, その要因のおもなものとして養蚕・製糸業の発達が増大されるということなどについて報告された。明治10年代くらいまでの地域人口統計資料は, これを人口学的に仔細に解析してみると, 幕末期の人口状況を知る上で, なかなか役に立つものであることを示された速水氏の報告は, 人口センサス・データが唯一のたよりであるような発展途上国についての人口の歴史的復元のためのセンサス・データの利用にとって, 示唆深いものであったと思われる。速水氏の報告に対しては安場保吉氏が討論者としてコメントをのべられた。

第5の報告(座長: 黒田俊夫氏)は甲田和衛氏による「センサスとカースト」と題する報告で, 最初に, 同氏がインドのカーストの研究にたずさわって

おられる理由を, 同氏がアンドラプラデシュの村でフィールド調査をつづけてこられた近親婚の研究と関係づけてのべられたのち, 1867~72年にはじまるインドの人口センサスの歴史において, カースト調査がどのように変遷してきたかを詳細にわたって報告された。宗派調査の一環として含まれていたのが, 人種調査の項目の中に移されたこと, カーストの流動的性質への認識がはっきりしだし, 人口学的統計を目的とするようなカーストの分類は無意味であり不可能であるとの認識に達してきた過程, そしてセンサスにおいて実際にカーストの集計が簡略化され, 遂に(一部の項目を除いて)カースト調査が廃止されるに至った経緯などについて説明された。カーストではないが, エスニシティそのほかの民族学的事項は, 技術的に可能なかぎり, 人口センサスの調査項目として調査されることが東南アジアの場合いろいろ有用であると思われるが, 甲田氏の報告はそういう問題との関連においても教示深いものであった。

第6の報告(座長: 三浦由己氏)は筆者による「タイの人口増加」で, 1960~70年センサス間のタイの地域別人口増加率を, 地形的特徴などと関連させて観察したもので, この報告は本誌前号所収の拙著論文を土台にしたものである。討論者は大友篤氏がつとめられた。

最後の7番目の報告(座長: 加藤寿延氏)は河野稠果氏による「アジア将来人口推計の基本問題」で, 前半では国連の世界地域別将来人口推計の方法, 問題点, 最新の推計成果などについて概観された。人口推計を行うに当たっては人口変動を説明する理論が必要であるが, これに関し, 河野氏は出生力低下に関する最近の諸説を比較し, 社会経済的発展の要因やモータベーションの要因を重んずる従来の考え方に対して, 新しい家族計画技術が伝播拡散するという, なかば機械的ともいえる効果が次第に見直されてきている状況を説明され, 家族計画の効果を人口推計に計量的に組み入れることの重要性を指摘された。

最後に総合討論で座長の黒田俊夫氏は, アジア人口研究における政策論的研究の意義を論じられて, 午後5時過ぎセミナーは終了した。(京都大学東南アジア研究センター教授)